

# プログラムと成果プロセス

## プログラム

## 内容

12:30 開催主旨の説明

大成建設株式会社の関文夫氏による問題提起プレゼンテーション「土木の仕事とは」

- ・近代土木史と土木デザイン
- ・土木デザイナーの仕事
- ・土木デザイナーと地位

という3つの大きなテーマで話をくくり土木分野における設計者の在り方について歴史的な変遷を踏まえ現状と今後の展開について講義

12:35 自己紹介

12:50 問題提起

13:15 グループ作業

「土木という仕事の魅力的なところ・問題だと思ふところ」というテーマに対し各自ポストイットに記入班ごとに議論しながらグルーピングを行い各班ごとにタイトリング



学生は授業や就職活動を通じて感じたことをアドバイザーにぶつけアドバイザーは現場の生の声でそれに答える様子が見られ各班で非常に白熱した議論が展開された



休憩時にはワークショップ参加者が全国各地から持ち寄ったお茶菓子で一息入れました



14:10 成果発表

中間発表として各班の提案を模造紙にまとめた(詳細は別紙)



深堀班



笠原班



平野班



柴田班

14:50 グループ作業

佐々木先生が各班の発表内容の中からリセットを考えてほしい意見群を選び「リセットボタン」を貼るリセットボタンを貼られた内容に対し「土木デザイナーとしてできること」を考え提案ここでは土木デザイナーがなすべき「モノづくり」「ヒトづくり」「シクミづくり」の枠組みをもとに議論

ここでの「リセット」とは「すべてをゼロに戻す」という意味ではなくて「そこんともう少し踏み込んで考えてみよう」という意味合いである

各班がそれぞれ異なったテーマでどんどん議論を深めていったこの頃になると議論は佳境を迎え、立ち上がって議論する参加者も多く出てきたかと思えば、誰かが冗談を言ったのが別のテーブルからは大きな笑いが起きるなど部屋全体が参加者の熱気で暑くなって来たように感じた



15:40 成果発表

最終成果として以下の各班の提案を模造紙にまとめた(詳細は別紙)



深堀班



笠原班



平野班



柴田班

16:20 全体総括

16:30 閉会挨拶

議論が議論を呼びとても有意義なワークショップとなった全体総括が終わってからも各班内容を更に詰めこの後のシンポジウムに備えていた

シンポジウムに続く・・・

### 笠原班



### 柴田班

### 深堀班

### 平野班

# 『土木のリセット!~いま、土木デザイナーに何ができるのか~』

## WS報告パネル 各班の中間発表と講評

### 柴田班



出張であちこちに行くことができ、実物を見ることができる  
⇨ 転勤が多い

3K(4K?): きつい、きたない、危険 (給料が少ない)

今のところ景観で飯が食えない

人の暮らしに多く関わることができる  
⇨ しがらみが多い(「大先生」の存在)



しがらみの「大先生」の存在というのは具体的に誰ですか?  
—ここでは言えないです  
(一同笑…それぞれが身近な大先生を想像したようです)  
名前は出せませんが小さな町での力のある政治家などのこと

景観で飯を食うためにどうすればよいか  
土木の仕事と地域との関わり方について

### 平野班



土木に対するイメージを3つに分けて考えると...

しくみ  
市民イメージ  
仕事イメージ

これらから  
仕組みに問題が多い  
→市民イメージや仕事のイメージが低下  
という悪い流れ

ではなく

土木デザインの向上  
→市民イメージの向上  
→仕事のイメージの向上  
という良い循環が生んでいく



イメージを具体的に言うとは?

しくみ  
土木に携わる人がもうからない、土木の仕事が市民に伝わりにくい  
市民イメージ  
土木の仕事は必要とされている  
一方で「ありがたみ」が伝わりにくい  
仕事イメージ  
スケールの大きい仕事ができそう、人と自然をつなぐことができる  
⇨ デザインの仕事で生きていけるのか? 不明

スケールの大小と仕事の意義・やりがい  
土木の市民イメージを高めるためには

### 笠原班



○社会への貢献 : たくさんの方が喜ぶ、イメージを変えることができる  
不特定多数の人と関わりを持てる

○技術的に誇れる : 永年にわたり残る、自慢できる

○土木屋の精神 : 国家に対する意識が高い

× お金と不正 : 閉鎖的な体質

× デザイナー・設計者の  
立場・地位: デザイナーとしての花がない

× 一般の人からみた土木: 文化的ではないと思われがち  
一般の人には興味がない

× 土木教育 : 土木関連の学科の名前がいろいろとあってわかりにくい  
大学教育が専門分化しすぎ



土木学科の名前は何かいいものの案は浮かびましたか?  
—…具体的にはないです(一同笑)



現在の土木系の学科名について(土木のイメージ低下)  
個人⇨組織の課題

### 深堀班



市民からみた土木

公共性が高いこと  
対象範囲が広く、専門分野が多岐に渡る  
⇨ 細分化しすぎて総合的に考えにくい

働くものからみた土木

やりがいを感じる  
つくるもののスケールが大きく  
永く残る  
デザイナー個人として名前を出すこと

デザイナーの職能として不明瞭  
仕事が地味  
つくったものの責任が不明確  
デザインが確立されていない  
デザイナー個人の名前が出ないこと

デザインの制約条件  
コスト面での制約  
一度つくったら簡単に建て直せない



公共物として、設計者として名前を出さないよさとは?  
—渋さ 出さないかっこ良さみたいな  
実際は?  
—ちょっと出したいです(一同笑)



土木デザイナーの名前が出ないことについて×2

土木の魅力と問題点を挙げ、各班ごとに整理して発表した

中間発表を終え

簡単な質疑を終えたあと  
佐々木葉先生が各班の発表内容の中から  
リセットを考えてほしい意見群を選び「リセットボタン」を貼る

ここでの「リセット」とは「すべてをゼロに戻す」という意味ではなくて  
「そこそこもう少し踏み込んで考えてみよう」という意味合いである



このパネルでは  
問題点を赤い字  
魅力を青い字  
で表現しています

の三つを基にした議論を展開していく

# 『土木のリセット!~いま、土木デザイナーに何ができるのか~』

## WS報告パネル 各班の最終発表と講評

- 柴田班
- ① 景観で飯を食うためにどうすればよいか
  - ② 土木の仕事と地域との関わり方について



① 歩掛り(何日、何人でいくら)のような考え方×

シンクミづくり  
『景観士』という資格をつくる



土木のデザインを**情報発信**する  
(例えば「造景」の復刊)  
これによって、景観事業の格上げを目指す

② シンクミづくり

地域の中に**作業拠点**をつくる  
メリットとして  
デザイナーと市民が触れ合う機会ができる  
地域に密着するデザイナーと  
地域間を飛び交うデザイナーが協力できる



Q.景観士にはどうやったらなれるのか?

A.そこまでは考えていません

司会「それは佐々木先生が考えてくれるでしょう」  
(一同笑)

- 平野班
- ① スケールの大小と仕事の意義・やりがい
  - ② 土木の市民イメージを高めるためには



① スケール(対象地の範囲、構造物自体の大きさ)の大小が問題なのではなくて  
**社会への貢献の大小**が重要である

② **社会への貢献が大きいことが  
市民イメージの向上につながる**前提で考えると...

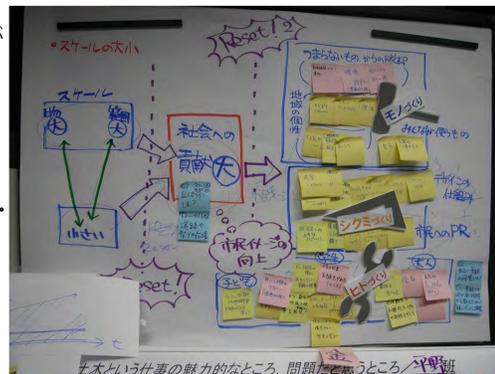


つまらないものからの脱却、地域の個性を引き出す  
→みんなが使うものになる



シンクミづくり  
市民へのPRを図る

子供→造形力をつける機会や  
土木を知る機会を設ける  
学生→面白い景観の授業を増やす  
大人→責任を持ってもらう  
行政職員の知識向上の為の研修を行う



Q.具体的に小さくて社会貢献度が大きいものは?

A.田舎の大事な道や  
都市の中での祭に使われる広場など

Q.どんな授業がおもしろいか?

A.4年生のときの授業(司会の関先生の授業)は  
おもしろいです(一同笑)

- 笠原班
- ① 現在の土木系の学科名について(土木のイメージ)
  - ② 個人⇄組織の課題



「土木のイメージが低いこと」と  
「わかりにくい学科名となっていること」とは関係がある

シンクミづくり

**市民と行政をつなぐ役割として  
設計者があるべき**  
もしくは、行政の中に設計者を組み込む



いいものをつくることで市民に認識され、守るようになる



様々なこと(芸術など)に興味を持たせる、旅をさせる

Q.「行政」をひとくりに考えていいの?

A.一番力を持っている部分を変えるのが大事

Q.土木デザイナー市長を良いのか?

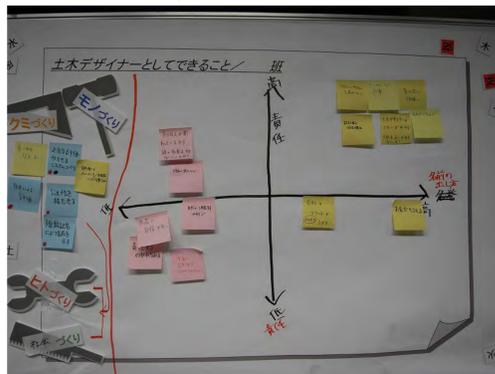
A.現実的には難しい

Q.今の学科名をどう思う?

A.あまり気に入ってないが  
時代に合わせていくべき



- 深堀班
- ①② 土木デザイナーの名前が出ないことについて



・名前を出す場合  
責任とモチベーションが生まれる  
丁寧な仕事に繋がる

・名前を出さない場合  
自然の力で決定されるようなデザインに  
自分の名前を出す意味がない  
責任から逃れられる

**現状は名前が出ずに責任は低い  
(匿名性と不明瞭な責任)が  
理想は名前がちょっと出て責任が高まる  
(若干の有名性と明瞭な責任)**

ちょっと名前が出るイメージ  
設計者だけではなく関係者の名前を出す

Q.構造物の違いによりは名前を出した方が良いのか悪いのかという議論はでたか?

A.川は出さない方がよい 道路の舗装などについては出さなくてよい  
橋など印象の強いものは意見が割れた

道路の線形がきれいなものなどに関しては出した方がよいという意見も聴衆から出る



中間発表でリセットされたテーマを中心に最終発表が行われた

総括では佐々木教授と  
橋梁デザイナーの竹ノ内キョウさんより  
お話がありました



おもしろいところもあった



シンポジウム報告パネル

WS・シンポジウムパネル作成関係者  
石橋知也 宮下真紀子 添田信行 大嶋雄介

ワークショップ終了後、濱田政則早稲田大学教授、国際航業HDの吉川正嗣氏を  
コメンテーターに迎えシンポジウムを開催した。

前の時間に行ったワークショップの内容を更にブラッシュアップし成果としてまず発表を行った。



ワークショップの成果発表を受け、コメンテーターの両氏に率直な好評を頂いた。

濱田教授：橋・ダム・川などこれまでバラバラに考えられ、市民も放置されてきた。  
「土木デザイン」とは、土木事業全体をコーディネートする技術のことではないか。  
そして今からそのような技術を身につけるべき。  
そのような土木デザイナーになるためには土木全体のことを学ぶ必要がある。

吉川氏：土木の今置かれている状況はマズローの言うところの「第3段階」の欲求。  
→求められているのは品格。デザイナーとして世界に通用する専門性が必要。  
設計計画の足掛かりは非常に安い絶対力を注ぐべき部分である。  
「住民参加」は大事だが、コンサルタントにデザインを語りかける力がないと伝わらない。

ワークショップ参加者から自由な意見を募った。

井下田(早稲田大学)：構造力学や水理学といった学問だけでなく、  
実務に近い部分をまず教えて欲しい。



濱田：教員に実務経験が無いのは事実であり大きな問題。  
非常勤講師を増やすべき。  
大学で世界に羽ばたく技術者を育てたい。  
でも勘違いして欲しくないのは教員は知識をただ教えるのではなく  
**インスピレーションを与える仕事。**

小谷野(東京工業大)：(ワークショップで議論となった)  
「景観士」は成立するか。



吉川：現代は商売のために資格をとる時代。  
そもそも大学のドクターというのは充分世界に通用する資格。  
(個人的には)資格を多く作って資格のために苦しむような仕組みには反対。

永山(東京大)：景観に携わる人は総合的に物を考えるという役割なのか  
個人的には総合的な研究者を育てる風土が足りないと感じている



濱田：研究室は学生の囲い込みをやめ、広く学ぶ可能性を与える必要がある。

前田(東京大)：大学で土木の歴史を学ぶ機会が少ない  
解析を語れても、都市を語れない人が多い



吉川：土木の分野は構造、コンクリなど細分化されエンジニアリングデザイン  
歴史という分野が欠けている。  
熱心な先生をつかまえて自主的に活動してほしい。

アキモト：(グッドデザイン賞の広報担当。  
木野部海岸など土木文野からの受賞も出てきた)  
外から見た素朴な感想として「社会における土木のイメージ」  
について語られることが少ない。



濱田：内輪の議論ばかりで社会への発信が足りない。  
土木学会でも社会への発信は最重要課題。  
(濱田教授は前土木学会会長。土木学会を代表しての発言。)  
論説委員会の設置。出前授業や防災活動の応援などの草の根活動の啓蒙。

アダチ(北海道専修大)：今の土木構造物は「行儀のいいデザイン」  
でしかないように感じる。  
土木の分野では思い切った表現は  
難しいかもしれないが  
前衛的なデザインを発信していく挑戦も必要。



小野寺(小野寺設計事務所)：土木のデザインは環境をつくること。  
インパクトのあるデザインは周囲の環境への  
極めて深い知見が必要。  
スピリッツを忘れてはいけない。

石橋(福岡大)：土木のコンペは少ないが  
新たな取り組みも見られている。



平野(東北大)：(学生コンペ「景観開花」を主催している。  
今年のコンペのテーマは「道の駅」だった)  
土木の分野においては技術競争や評価のしくみが  
まだ確立されていない。  
若い技術者は工夫するほど怒られる、  
急いでやれと言われる逼迫感を抱えている。  
建築に比べて努力が認められ、仕事を楽しいと感じる土壌がない。  
土木学会田中賞についてもエンジニアとして理解できないときもある。

吉川：価格競争という形態は変わってきている感はある  
(コンサルタント経営者として)。  
評価にまだ問題はあるが工夫が報われる時代になりつつあり、  
技術者の顔も明るい。



濱田：いっそ「先輩賞」にしてしまったらどうか(笑)。  
そもそも賞を作るしくみにも問題はある。

佐々木：なあなあとぬるま湯からはなにも生まれない。やることを精一杯やらなくては

交流会につづく...

ワークショップ成果発表

講評

フロアも交えた議論

総括